

エナジーグリーン株式会社 電力小売はじまりプラン



エナジーグリーン株式会社

2015.9.21

「珠玉の電気」とは、なんだろう・・・

無農薬野菜、オーガニックコットン、ゼロエミッション住宅・・・私たちは、いろいろな本物を求め、そして作り出してきた。それが電気でできないはずはない・・・。



1. 再生可能エネルギー

オーガニックな電気は、再生可能エネルギー100%。
そして、もちろんCO2排出もゼロ。
世界でいちばん、環境にやさしい電気。

2. 市民・地域のエネルギー

大きなダムや、化石燃料の発電所ではない。
もちろん原子力でもない。
地域の資源を生かし、地域の人が開発した電気。
雇用を生み出し、環境を守る、地域を支える電気。

3. 完全なる透明性

電源種別、コスト、お金の流れなど完全公開。
発電データの公開、可視化にもチャレンジ。
安心と信頼をよせられる電気。

しかし・・・

小売電気事業者に課せられた「30分同時同量」義務。
それに伴うインバランスコストの発生。
当面は、太陽光発電や風力発電は使えない。

FIT電源からの調達による、上乘せ価格の先払い負担。
負担分を交付されるのは3ヶ月後。

再エネを供給したくても、使える電源が極端に少ない。
バイオマスや小水力、地熱など、計画を出せる電源が必要。

そして、再エネ表示禁止、回避可能費用の変動制、託送料金の高止まり。
3つのハードルが、再エネ小売電気事業者の前に立ちはだかる。

再生可能エネルギー小売電気事業者 に立ちはだかる3つのハードル

1. 電力の内訳：電源表示問題。

「再生可能エネルギー」の電気を、「グリーン」とは言わせない。

2. 回避可能費用：発電所からの仕入価格。

これまでの回避可能費用は、そのエリアの電力会社の火力平均。

それが2016年から「市場価格」に変更になる(経過措置あり)。

「FIT電気」は、FIT価格と回避可能費用の差額を負荷金で補填される。

FIT価格と「交付金」の差額が「仕入れ価格」

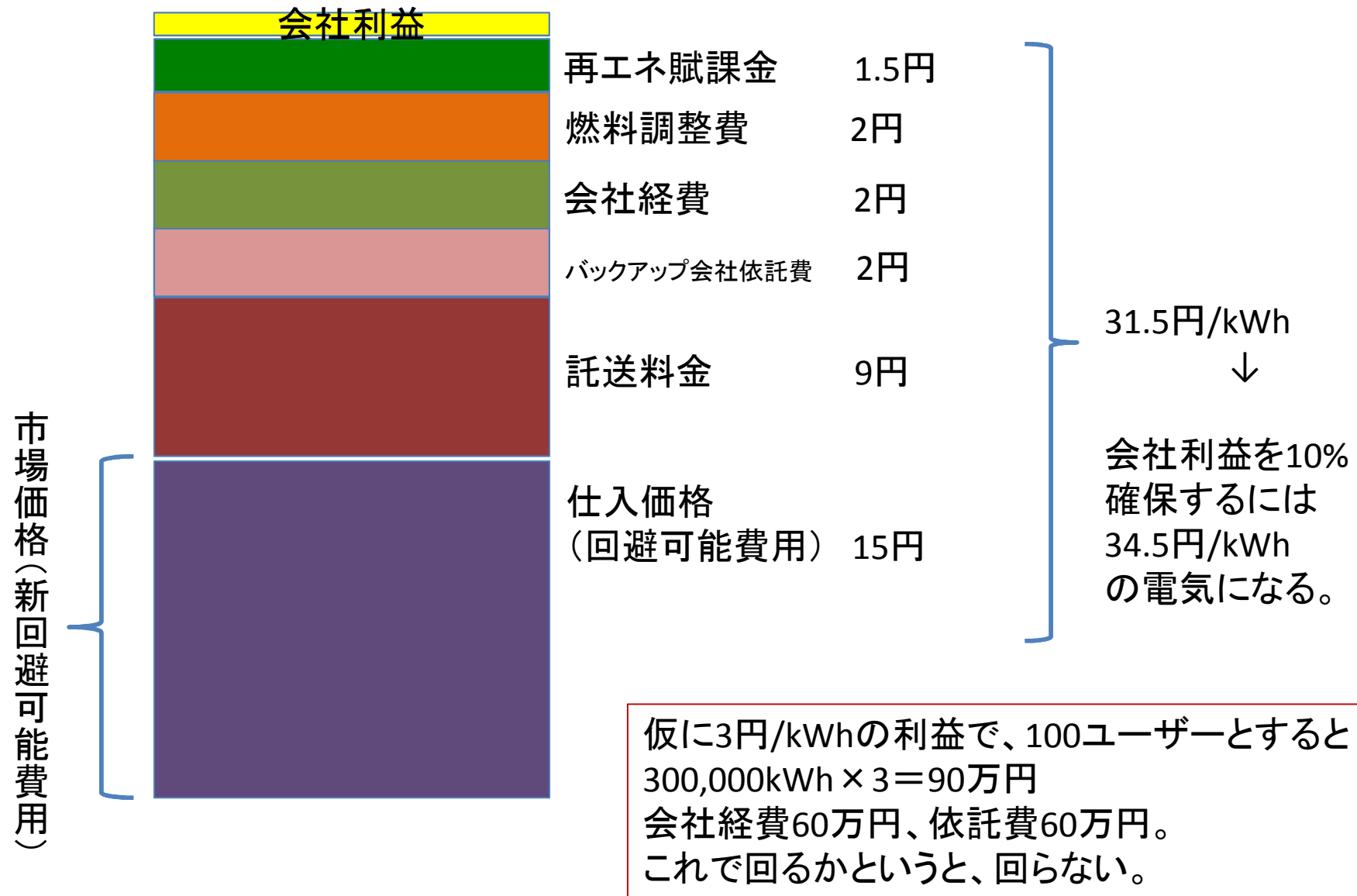
「市場価格」が高くなると「交付金」が減り、仕入れ価格が高くなる。

2014年の「市場価格」は、回避可能費用の1.5倍だった。

3. 託送料金：送電線使用料

再生可能エネルギーだけの問題ではないが、巨大送電線を必要とするのは巨大発電所。そのコストを再生可能エネルギーに押し付けている。

「再生可能エネルギー電気」低圧供給の内訳？



電力供給の複数パターン

1. 低圧供給：珠玉の電気。100%再生可能エネルギーの電気を、通常の電気料金よりも1~2割程度高く(30円→35円)供給。特定の再生可能エネルギー発電所(バイオマス、太陽光、小水力など)にひもつけ、その発電所の発電量を下回らない形で供給。

ただしFIT電源を含むため、現在の制度では、CO2排出量ゼロにならない。電力会社からの常時バックアップ契約も外せないため、緊急時に再生可能エネルギー以外の電気が入り込む可能性はある。

2. 高圧供給：再エネ50、再エネ30、再エネ10の3種類のメニュー。現状の制度化では「再エネ100」は高圧供給では不可能。価格は再エネ50で現状維持、再エネ30で95%、再エネ10で90%相当を目指す。

balancing groupからのガス発電やゴミ発電が含まれる。市場調達、常時バックアップも外せないため、再エネ比率は常時ではなく年平均となる。

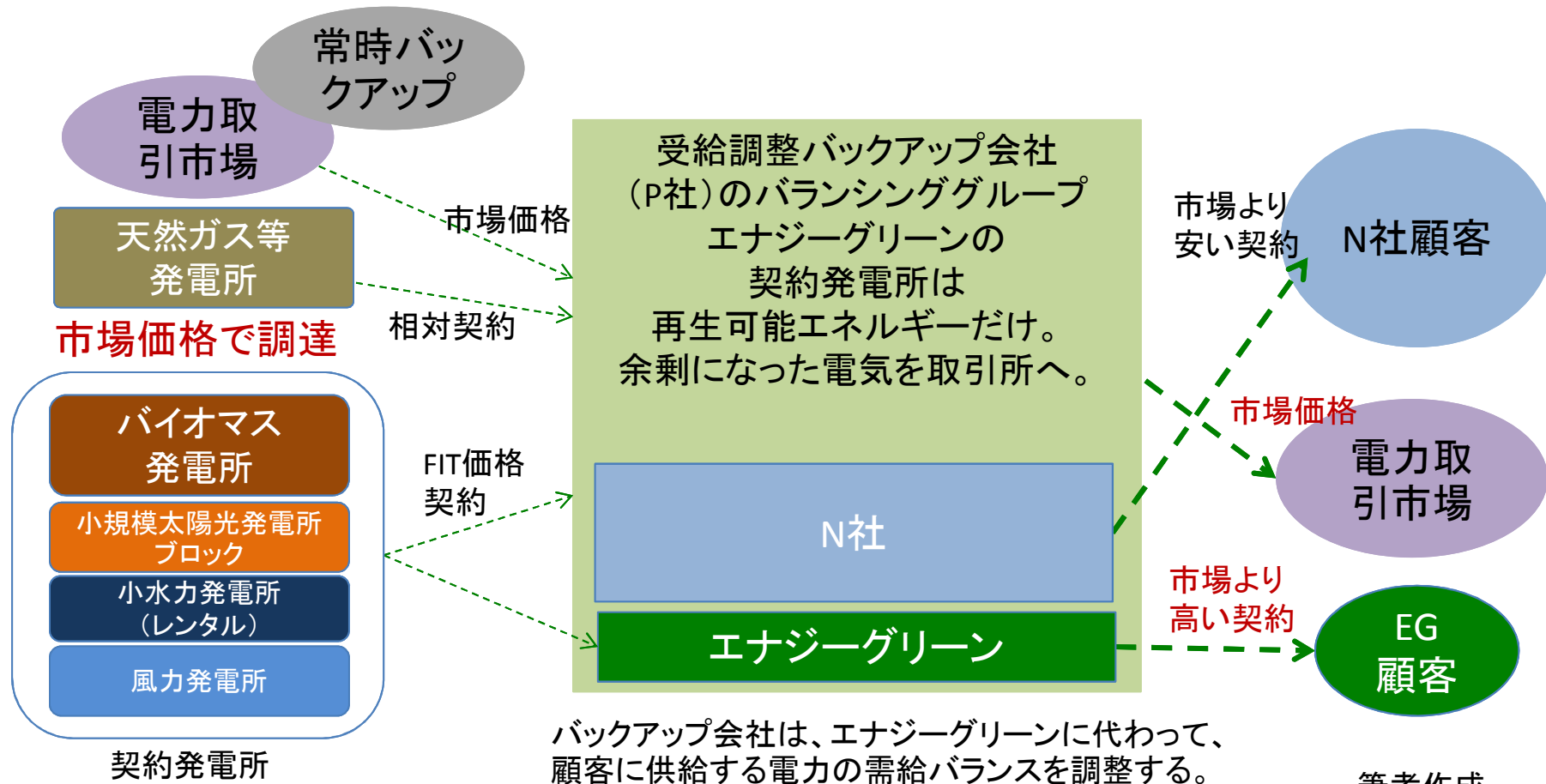
balancing group: 相互融通を行う新電力のネットワーク。

常時バックアップ: 契約発電所側のトラブル発生時にも停電や電圧低下を発生させないように、送電線からいつでもバックアップ供給を受ける仕組み。

部分供給: 昼夜を通じてベースとなる電気は電力会社、それ以上を別の電源から供給。

再エネ100%を供給するイメージ

インバランスコストを回避するためには、顧客の需要量を十分に上回る再生可能エネルギー供給量を確保し、余剰になった電気を「電力取引所」に販売するしかない。取引所の価格は「回避可能費用」(＝仕入原価)になるので、ここでの取引はプラスマイナスゼロでしかない。(経費、外部委託費分だけマイナス。)



EG社電力小売開始の流れ(想定)

